

安全・危機管理ワーキンググループ 議事概要

平成27年2月10日

文責 坂谷定生

開催日時：平成27年1月14日（水）18：30～20：00

開催場所：株式会社トーヨーアサノ6F会議室

出席者：植松副会長、坂谷GR、鈴木一行、守本孝造、渡邊康夫、寺澤寿一 計6名

<議事概要>

坂谷GR：前回鈴木委員から「落水」のことについて協議しようという提案が出され、皆さん賛同されたので、落水をテーマとします。鈴木委員資料と趣旨説明をお願いします。

鈴木：落水については安全委員会所管の仕事だという認識をした上での提案書です。その上で問題提起するかどうかはWGの判断になると前置きした後、添付資料の内容を説明した。

植松副会長：安全講習などは大変重要である。艇及び乗員の安全確保のためには、艇の上で命令系統がしっかりしていなければいけないし、適切な命令が出せるかどうかにかかっている。

渡辺：落ちたらまずは助からないと思うので、絶対落ちないようにすべき。

守本：キングスカップで自艇が落水者を出すという経験をした。その時は後続の艇にすぐに助けてもらったこともあって、落水者自身は落水したという認識がまるで無かった。助かったとしても、もっと真剣に捉えてほしいと感じた。

渡辺：事例は沢山あるので、何故落ちたかということを実例で示すことが重要だ。

守本：落水した時どう対応するか落ちないようにするにはどうすべきかというような指導的なものが、JSAFのHPからダウンロード出来るようなシステムがあってもいいんじゃないかと思う。今は無いので何とか考えてほしい。

渡辺：事例は説得力があるので耳で聞くだけでもよく頭に入っているもので、自分がそうになったらこうしようとか考えやすいが、文字で知らせるといのはなかなか頭に残らないのではないかな。

植松副会長：文字が適さないというのなら、ケース例が沢山あるのだったら、イラストを利用して、単純に解り易く落水しないようにする方法等を示せばいいのではないかな。

寺 澤 : NORC時代のオフショアに載せた大島レースの死亡事故は非常に参考になると思う。事故直後に事故調査委員会を設置し、原因を追究した。最後には遺族までフォローしたという内容が詳細に出ている。事故報告はこのような内容のものをあげてほしいと考えている。また、ISAFが出している「Safety at Sea」の翻訳が未完成だが、これを早く完成させて加盟団体等に配布するだけでも安全のためには有効な手段になる。

坂谷GR : 事故例を収集して検証するのも難しい部分がある。ゲームレースの事故に関しては、きっちりした報告書があるが、沖縄-東海YRやその他のレースについては事故の原因そのものの核心がよくわからないといえる。

寺 澤 : 調査結果として纏めるにしても、どこまで表現できるかが問題になる。

※この後落水に関係する数例の事故に関し、回想やその時の対応等について各委員からいろんな発言があった。

鈴 木 : 危機管理の面から言うと、このWGの発展型として危機管理の窓口を作り、チーフとなる者の下に緊急時に動けるブレーンを用意し、当然その中には事務局員も入り、指示命令システムを決めておくことが必要であろう。対外的にはこのことを知らせておけば対応出来ると考える。

植松副会長 : JSAF主催（共同主催）のレースに関してはそのようにすればいいと思う。

鈴 木 : ゲームレースの事故の時は大変で対応に苦慮したが、当時の担当者と連携良くやって、時間はかかったが処理できた。

寺 澤 : 今はそのようなことを解っている人達がだんだん少なくなってきて、何かあった時に困ることになるような状況で、こんな時に限って再び大事故が起こるような気がしている。

坂谷GR : 先般WGから理事会で提案したが、それをどれだけの人に理解してもらったかが問題である。

鈴 木 : JSAFに責任が無い場合でも主催団体と連携し、JSAFに情報が入るようにしておかないと対応できない。

坂谷GR : 先般提案したものを月末の団体長会議でも周知するが、その内容や考え方は事故処理等も含め全て主催者で対応すべしということです。しかし今議論している危機管理に関する部署を作ったとすると、それを頼ることが推察されるので、十分協議した上で今後のことを考える必要がある。

守 本 : 危機管理意識を向上させる上では、加盟団体等を指導していくことが今後大切なことであり、団体長会議が力を発揮すると思う。

寺 澤 : 危機管理に関するアドバイスや情報を危機管理WGのHPを立ち上げて、どんどん流していけばいい。

守 本 : J S A FのHPに関して不満があります。会員になってほしいとか、講習会がいつありますとかの案内は出ているが、情報を取りたいと思っても会員が欲しい情報がほとんど無いのが実情なので、会員が活用できる情報を掲載してもらいたい。

植松副会長 : 一人で対応しているので手が回らないというのが本音ですが、何とか希望に添えるように頑張ります。

坂谷GR : 今後はこの案に沿って安全委員会と十分に調整しながら方向性を見出していきたい。

次回を2月27日(金)18:00より、トーヨーアサノ6F会議室で開催することを決定し、散会した。

以上

※ 検討資料添付

落水

1. はじめに

ヨットにおける人命にかかわる大きな事故として 落水、沈没、座礁、落雷などいろいろなリスクがある。

最近の事故において とくに落水の事故例が目立っている。 とくにベテランと呼ばれる経験豊富なヨットの乗りの落水が多発している事実を考えると単に自己責任で再発防止の注意勧告だけでいいか否かWGとして検討が必要と考える。

2. 落水の防止策、 および落水時の救助に関する件

落水に関しては 事故の例を考察しその上で落水の防止策を検討する。
また落水時の救助に関する問題点を考察しハード、ソフトともに検討をする。

3. 落水に関する事故例

考察する際に何故落水したか？のポイントで事故例を検証する。

- 1992年1月 JGYR (グアムレース) 太平洋上マリンマリン落水大事故
- 2012年5月 沖縄東海レース 落水 死亡
- 2013年4月 回航中 (アリランレース) 落水 死亡
- 2013年4年 沖縄 落水 無人航行
- 2013年10月 東京ヨットクラブレース 衝突 落水 死亡
- 2014年8月 トランス相模レース 落水 救助

4. J S A F および加盟団体の対応

- 2013年12月 J S A F 外洋安全委員会より通達
「安全にセーリングを楽しむために」
- 2013年～2014年 加盟団体、クラブで安全講習会の開催

5. 落水の防止策

- ハードウェア ライフハーネス
- ソフトウェア スキルアップ、慢心

なぜ落ちたか？ 落ちないために何が必要か？

なぜ落ちたか？

- 1. ブローチング
- 2. 千波一波の予想されない波
- 3. 天候の急変
- 4. ヘルムスマンが掴まる場所なし

落ちないためには？

1. スキルアップ？（知識）
2. 慢心の防止 デッキ上にいるときは緊張感を 座る場所の検討
3. ライフハーネスを常時装着
4. ライフハーネスを船体川上に装着（ロングの川下装着について）
5. ジャックステーの可否
6. ライフラインの整備

6. 落水してしまった場合

ソフトウェア

1. 落水者から目を反さない
2. 船を止める
3. 救助を行う

見失った場合

1. 救助要請（海上保安庁 携帯電話、VHS 無線）
携帯電話（防水、バッテリー）
VHS 緊急時に使えるように
2. 位置情報の記録

ハードウェア

1. ライフジャケット
2. パーソナル イーパブ（現在日本での認可検討中）
3. 反射板。 レーダーレフレクター、個人フラッシュ
4. ライフスリング
5. ライフラフト、救命浮環

7. 落水者救助法

I S A F Speical Regulation Appendix D

クイックリターン クイックストップ 8 の字救助法

落水した人をデッキに引き上げる法

1. ライフスリング
2. セールとハリヤードの利用
3. 専用引き揚げ道具（多きため船への搭載は??）

8. 落水者の対応

1. 体力の温存 泳がない
2. 体温の低下注意
3. 見つけやすい工夫（ハード）

9. 蘇生技術

1. 救命措置 (心臓マッサージ、AED、人工呼吸、怪我対応)

対応に関する アイデア

1. 慢心 安全講習会 有用 ただし目的を明確化
 ひやりハット活動 有効、 安全週間 有効
2. 落水防止 ハーネスの着用
 (風が強い場合、波が悪い場合、スピンラン、
 コックピット以外の作業)
 装着場所 位置の各艇での装着
3. 落水時 サバイバルの知識
 装備の検討



提案

1. 安全装備品を カタログ化 (JSAFしかできない)
 2. 落水に関するわかりやすい説明資料
 落水予知危険訓練シート
 1. 艇が追手で軽快にスピンラン
 2. 夜間ショートハンドでワッチ
 3. シングルハンド、ダブルハンドでの対応
 4. 天候、波に関する変化の予想
 5. そのたケーススタディを項目化
- 以上 危機管理WGの討論資料